

Title	日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！Ⅱ
Author(s)	林田, 雅至
Citation	Communication-Design. 2013, 8, p. 57-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24611
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！Ⅱ

林田雅至（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

The first step towards reaching our goal of being a Language and Cultural Barrier Free Japanese Society

Masashi Hayashida (Center for the Study of Communication-Design, Osaka University)

ランゲージバリアにかかわる直面する社会が諸問題を解決するために2011年度も活動を継続した。その結果、様々な試みを可能にするヒューマン・リソースのみならず、医学・法学分野において最新技術の電子媒体を活用することによって、問題解決の緒に就くことができた。

To face the problems concerning language and cultural barrier, it is necessary to depend on human resources and to use ultimate medical and legal application software, which enabled us to begin to resolve them in 2011.

キーワード

言語・文化的バリアフリー、ヒューマンリソース、ITアプリケーション
Language and Cultural Barrier Free, Human Resources, Application software

序論

2009年度CSCDで実施した「外国籍住民の日本語・日本文化学習支援プログラム」において、グローバルな多言語・多文化状況下「相互理解のための日本語」という考えに基づき、「言語のためのヨーロッパ共通基準枠（Common European Framework of Reference for Languages）」通称CEFRに設定された評価基準を参考にした、生活者としての外国籍住民（外国人）を対象とした学習プログラムの見直しが行われようとしている状況を踏まえたものの、デフレ苦境の状況は極めて厳しく、雇用創出の政策提言が最優先課題として位置付けされた。そして継続して、2010年度、より幅広い視野でプロジェクト「日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！」を展開した。特に後者については、所属機関誌Communication-Design第5号に掲載の機会を与えていただいたことは望外の喜びであったことに加え、学内外他機関への認知を進めることにも大いに役立った。

1. 豊中キャンパスにおける「洪庵塾」International Resources 開花せり

本来一介の語学教師であり、学部、大学院、奉職した大阪外国語大学において生粋の単科大学育ちで、日本における語学研究機関なり、外国人留学生、研究者が一堂に会する研究機関の一員として羽振りのよい研究生生活を送っていたと自惚れていた。2007年10月統合にともなう人事異動及び研究室引っ越しがもたらした効果は絶大であった。確かに語学屋にディシプリンはなく、よく言えば百科全書派とも言えるが、単に語学知識を踏まえた物知り屋に過ぎないことが鮮明になった。しかし逆にそうした「がらんどう」の中身なしをブドウ酒を注ぐ革袋に譬え、西洋建築の巨大な「伽藍堂」であるとするれば、そこには無尽蔵に知財というワインを注ぐことは可能かと思ひ、今更新たにディシプリン獲得を求めず、せめて30年にわたって構築したネットワーク＝「伽藍堂」を用意することにした。それが「洪庵塾」International Resourcesであった。もともと「洪庵塾」は適塾記念会が認可したもので、筆者はその実施責任者である。横断的な連繋が生まれ、学生の間にも情報が伝播し、その国際的人材ネットワークに集約された多言語人材（本学学生）が同行する「ユネスコ国際理解講座若年層海外研修」も盛況を極めている。

また、本センター兼任教員であり、本学保健センター所長（教授）守山敏樹医師には、引き続き日本語、英語、中国語（簡体字・繁体字）、韓国朝鮮語、タイ語、ポルトガル語版『医療現場における外国語指さし会話ブック』（仮）南江堂による上梓の総監修をしていただいた。

この本の趣旨は「近年、国際化に伴い世界各国から多くの方が日本を訪れるようになった。しかし、医療機関でのコミュニケーション能力は命にかかわる問題であるにもかかわらず、言葉の問題により十分な医療サービスを提供出来ていない実態がある。外国人の多くもまた言葉の課題を原因として、医療機関にかかることに不安や不満を感じている。意思疎通が不十分なままだと適切な診断・治療に支障がでるばかりか、誤解によって患者が望まない治療を行ってしまうケースもある。彼らが安心して医療機関を受診するためには、医療機関側の知識や対応も重要となる。

そこで、本書は、問診～診断～治療を行う上で、口頭での意思疎通が困難な場合にその場で本書を指さしながらコミュニケーションをとることで、意思疎通を容易にするツールを目指す」というものである。

2011年度は原稿の翻訳に注力し、特に英語翻訳については、ハーヴァード大学公衆衛生院と「国境なき医師団」に監修をいただいております、翻訳の中身の充実に努めている。そうした中、多言語翻訳チェック作業において、タイにおける洪水被害が間接的に人材確保に困難

を来たした時期があり、随分と気を揉んだものの、「洪庵塾」International Resourcesなどを媒介することで、豊中キャンパスで、理科系研究者で、翻訳資質にすぐれた人材を発掘することができた。

2. アンドロイド仕様多言語対応問診票開発～Information architecture 構築に向けて～

2011年度最大の成果はIT企業投資による医学系研究科との共同監修になる「情報視覚化による多言語問診票」の開発であった。順風満帆の船出ではなかった。英語翻訳以後、多言語化が進まず、スタッフ一同ジリジリと徒に日々が過ぎて行き、袋小路に追い遣られていた。ある時期から「洪庵塾」International Resourcesなどが有機的に機能し始め、あつと言う間に有能な人材網が構築され、これがInformation architectureだなど実感した。

夏休みを利用して、追加の中国語（簡体字・繁体字）、韓国朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語も含めて、アニメーションや音声により、外国人患者が直感的に理解できることを目指し、各国・民族が症状に対してもつ特徴的な表現に対応することで、よりきめ細かな症状把握が可能となった。この点については、翻訳・録音者がそれぞれ数度にわたって、表現方法など推敲を重ね、よりよい形を追求した。試作品が出来上がった段階で、11月から1月にかけて病院などで実証社会実験を行った。

また、愛知県立大学で開催された、医療分野ポルトガル語スペイン語講座（ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成）シンポジウム・テーマ「大震災から医療通訳を考える」（2011.11.3）で発表報告をした際や、大阪国際交流センターにおいて、「人材育成講座」多言語支援センターの活動に焦点を当て、「災害時における外国人支援」をテーマに開催された「人材育成講座」の一環をなす「多言語での情報提供の必要性～Language Barrier Freeという概念」（2011.12.15）で講師を務めた折に、「アンドロイド仕様多言語問診票試作品紹介」をIT企業担当者から説明をいただいた。

とりわけ、前者のシンポで同席したJAあいち厚生連・豊田厚生病院看護師長細井陽子氏が報告した「豊田厚生病院における医療通訳の現状と課題」は大変に興味深く、入管法改正直後に来日したブラジル、アルゼンチンの日系人看護師3名（現地で国家資格を取得）を日本での資格がないにもかかわらず、院長決済で看護助手として、本採用し、以来、日系人3人が医療通訳の最前線に立つ所謂ソーシャルワーカーとして特に日系ブラジル人の医療健康対応に奔走してきた経緯が示された。それはやはりトヨタの工場労働者の福利厚生を目途に実施されてきた特殊性がある。この病院については12月に上記IT企業担当者が改めて表敬訪問し、2～3時間にわたり、機器について懇切丁寧な指摘をいただいていることを紙面を借りて、ここに改めて感謝したい。

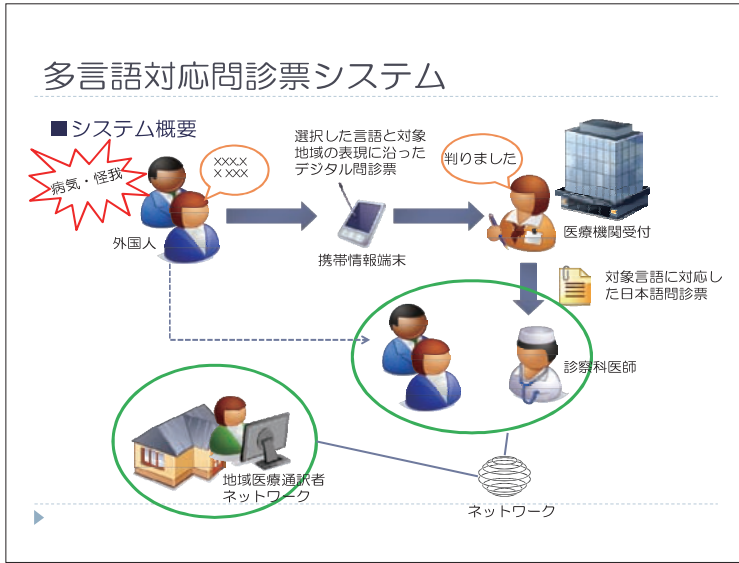


図1 アンドロイド仕様多言語問診票活用概念図



図2 多言語問診票試作品紹介資料より

3. Language Barrier Free 概念の深化

Language Barrier Free の概念についても年間を通じて、深化させることができた。上記シンポ、講座の他にNPO関西生命線（代表：伊藤みどり）：秋季多言語多文化教室、テーマ

「子育ての母語・母文化を考える」(2011.11.30)で発表したり、また年度末に開催したシンポ「大阪国際化戦略のためのLanguage Barrier Freeのさまざまな試み」(2012.3.2)——このシンポについては2012年度改めて報告書を作成する予定であり、ここでは説明を割愛する——を実施したりする過程で、Language Barrier Freeの概念を明確にすることができた。

さらに年度末にかけて、上記「アンドロイド仕様多言語問診票」の一層の多言語化を進め、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、タイ語、フィリピン語、インドネシア語、マレーシア語、ベトナム語、ヒンディー語の11言語について、翻訳・録音作業を薄氷を踏む思いで、2月中旬までに完成させた。

4. よみかき茶屋参与観察雑感

2011年度も通年参加した大阪市主催「日本語教室」通称「よみかき茶屋」(大阪市総合生涯学習センター)において、国際結婚して来日し、経済自立を図ろうと懸命の識字化を進めるウクライナ出身者と上海出身者2人を重点的にサポートした1年であった。後者はスーパーマーケットのレジ係を務めるほどまで上達し、忙殺を極める中、別途夜間中学において日本語学習のより一層の深化を怠らない。ただ、所謂日本語の「外来語」が苦手で、カリフラワーとブロッコリーの実体との結びつきに混乱を来たすことがあると自戒しながら、話していたのは印象的であった。

5. 司法通訳翻訳電子教材の多言語化の試み

田中規久雄氏(法学研究科、兼任教員)は、「高度法情報発信のための多言語情報の最適組み合わせに関する研究」(科研, 2010-13)共同メンバーであり、2010年度報告した大学院授業担当のロシア語司法通訳者松本正氏の積年の経験を踏まえた成果を基に2011年度は多言語化を進め、英語、中国語(簡体字)、ポルトガル語の各版を作成した。とりわけ2010年度から継続してロシア文学研究者でロシア語教育にも明るい加藤純子氏にはデータ作成から、現場の録音作業まで多大なる貢献をしていただいたことをここに改めて感謝申し上げる。



図3 司法通訳養成教材：英語版の一部



図4 司法通訳養成教材：中国語版の一部



図5 司法通訳養成教材：ロシア語版の一部

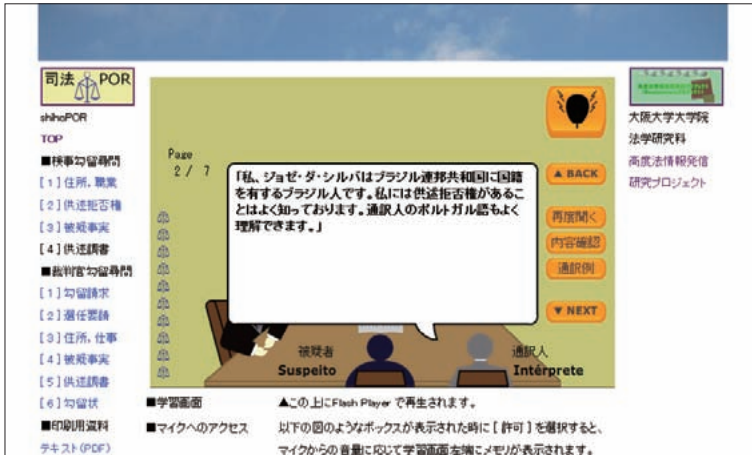


図6 司法通訳養成教材：ポルトガル語の一部

6. エピローグ

2010年度の繰り返しになるが、様々な試行錯誤を通して、排他的意識の排斥を目指したつもりである。やはり、人間の内的な偏見の除去には年数がかかることを改めて実感している。

参考資料

Communication-Design 第5号

(http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBCSCD/cdob_05_021.pdf)

林田雅至（編）（2012）「日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！Ⅱ」報告書〔2011年度 CSCD 社会学連携事業，大阪市・大阪大学包括協定実績〕、CSCD「コミュニティ」部門：多文化コミュニケーション・デザイン叢書Ⅳ，pp.85.

愛知県立大学主催「医療分野ポルトガル語スペイン語講座（ポルトガル語スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成）」シンポジウム・テーマ「大震災から医療通訳を考える」:

<http://www.ist.aichi-pu.ac.jp/lab/qua/com-medico/info/2011/09/-23113-23113-14301740.html>

公益財団法人・大阪国際交流センター主催「国際交流人材育成講座—災害時における外国人支援」関連「アイハウスニュース」第144-145号：

<http://www.ih-osaka.or.jp/i-house/ihn144.pdf>

<http://www.ih-osaka.or.jp/i-house/ihn145.pdf>

2011年度NPO関西生命線「子ども若者育成・子育て支援功労者」:

<http://www8.cao.go.jp/youth/ikusei/support/h23/pdf/list.pdf>

よみかき茶屋（アーカイヴ）:

<http://www.gcn-osaka.jp/japanese/lj02-02-03-23.html>

http://www.manabi.city.osaka.jp/contents/lll/ityou03/buckup/200309_p2_1.pdf

<http://yoriki2.jp/nepal/htm/2013-1.htm>